

原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究
—「のだから」を中心に—

ピヤトーン・ケウワッタナ

A Contrastive Study of Reason Expressions
in Japanese and Thai:
Focusing on the usage of “Nodakara”

Piyatorm KAEWWATTANA

Abstract

The purpose of this research is to compare conjunctive expressions in Japanese complex sentences to that in Thai complex sentences by focusing on the usage of expressions giving reasons in reason giving clauses especially “No-dakara” in Japanese language. “No-dakara” is used for reasoning expressions in complex sentence as those using “Kara” or “Node” do. However, other than the reasoning expression, “No-dakara” there are three more extra usages that do not have “Kara” and “Node” with them. “No-dakara” is used when the listener knows some fact as does the speaker and it is also used when the speaker expects that the listener should already know about some fact that the speaker know. Although the reason giving expressions such as “phró” and “cuṅ” in Thai language can be used for reason giving expression as “Kara” or “Node” do, it is still unclear what kind of reason giving expression in Thai language can be used to mean as same as “No-dakara”. Therefore, it is necessary to focus on the meaning and usage of “No-dakara” and the translated reason giving expression in Thai language and find out the differences

between them.

1. 「のだから」の考察

本稿では、「のだから」の意味・用法を中心に考察し、タイ語における表現と比較する。「のだから」は、文末表現「のだ」と原因・理由表現「から」から構成されている表現であるが、「のだから」の意味・用法は通常の原因・理由を表す「から」や「ので」とは異なっている。「のだから」は、判断系の原因・理由表現の中でも代表的なもので、原因・理由を表すほかに、判断・根拠も表す。タイ語では、このタイプの原因・理由表現に類似している表現は対応していないため、一般的にどのような表現に近いかは不明である。タイ語における因果関係を表す表現の中に、「のだから」に近い働きをするものがあるかどうかを検討する。

「のだから」についての研究はいくつかある。その中で、田野村忠温（1990）、野田春美（1995）、岩崎卓（1996）、前田直子（2009）、益岡隆志・田窪行則（1992）などが特に重要である。「のだから」の意味・用法に関する研究のほかに、鈴木庸子（2008）など、中国人の学習者における「のだから」の誤用に関する研究もある。しかし、タイ語との対照研究に関しては、管見の限りまだ見当たらない。そのため、日本語における研究とタイにおける研究を比較し、さらにこの点について考察する必要がある。

2. 「のだから」の意味・用法

「のだから」は、「から」や「ので」と同様、原因・理由を表す表現であるが、事態の原因・理由を表す場合には使用されない¹⁾。話し手による判断または態度の根拠を表す場合に使用する原因・理由表現であり、典型的な判断系の原因・理由表現の一つである。前田（2009）は、「のだから」の特徴は三つにまとめられると述べている。即ち、「後節には話し手の発話時における判断を含む形式に限定される」こと、「前節は聞き手が既知っている事柄であることが多い」こと、「話し手は聞き手が前節のことを当然知っているべきであると強調している場合もある」こと、である。

まず、「後節には話し手の発話時における判断を含む形式に限定される」

に関しては、典型的な判断系の原因・理由表現が共通している特徴であるといえる。要するに、後節には話し手による判断・命令・依頼・意志などの表現があり、ただ出来事の生起を表す文ではないということである。例を挙げれば、「～でしょう」「～だろう」「～なさい」などの表現である。これらの表現は、「のだから」の後節によく現れる。

- 1) 私でもできたのだから、あなたにできないはずがない。(D)
- 2) 冬の山は危険なのだから、くれぐれも慎重に行動してくださいね。(D)
- 3) しかし今のところあなたを通してよりほかに、ありのままの兄さんを、兄さんの家庭に知らせる手段はないのだから、あなたも少し真面目まじめになって、聞き慣れない字面じづらに眼を御注おそそぎなさい。(J)
- 4) 下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止よした方が好いというのです。(K)
- 5) 源五郎は六尺近い大男である。それが薄暮のなか、山伏姿で金剛杖を手にいきなりあらわれたのだから、侍はさぞびっくりしただろう。(C)
- 6) 国民の重要な情報を守るためなのだから、徹底して守ってほしいが、それだけの予算を確保できるかどうかが大きな課題だ。(S)

一方、岩崎卓（1996）及び前田（2009）は、文末にこれらの表現がない場合でも、「ものだ」「のは当然だ」など話し手による判断を述べる文に近い意図と持つこともあると述べている。

- 7) 私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。(K)
- 8) 二百人で、守りのうすい搦め手から攻め込んだのだから、与七郎より先に本丸に到達していてもいいはずだ。(C)
- 9) もう七十歳なのだから、そんなことがあってもふしぎではない。(B)

さらに、前田（2009）は、「のだから」の後節には評価的な感情表現も用いられることもあると述べている。また、その場合の感情表現はマイナス表現の場合が多く、プラスの場合であっても意外性を表す場合が多いと述べている

- 10) 「何心配するほどの事じゃなくてよ」とか答えてただ微笑するのが常であった。それをまるで逆さかさまにして、自分の最も心苦しく

思っている問題の真相を、向うから積極的にこちらへ吐きかけたのだから、卑怯ひきょうな自分は不意に硫酸をあびせられたようにひりひりとした。^(I)

- 11) 人に手紙を出すのも、旅行するのも、聖書を読むのも、女と遊ぶのも、井原と冗談を言い合うのも、みんな君の仕事に直接、役立つようにじたばた工夫しているのだから、かなわない。^(G)
- 12) そんなことしながら仕事のペースを落とさなかったというのだから、ある意味恐ろしいが。^(F)

このように、「のだから」の後節は、事態系の原因・理由表現の場合と違って、単なる結果を表すものではない。話し手の判断や感情表出が大きく関わる表現である。

次は、「前節は聞き手が既に知っている事柄であることが多い」という特徴について検討する。「のだから」の原因・理由文では、前節の内容には既に聞き手が知っている情報である場合、または話し手が聞き手も前節のことを知っていると思なしている場合がよく見られる。

- 13) まだ子供ののだから、分からなくても仕方がないでしょう。^(D)
- 14) 機構職員の個人アドレスにメールが届いているのだから、最初の感染でメールのやり取りなどが流出したことを疑わなければならない。しかしここでも静観し、ネットを遮断しなかった。^(S)
- 15) 不審な通信を再び検知したのに、ここでもネットを遮断しなかった。2回目の不審な通信なのだから、この時点で多数のパソコンがやられていることを想定し、機構全体のインターネット接続を遮断するべきだった。^(S)

さらに、この二つ目の特徴は三つ目の特徴「話し手は聞き手が前節のことを当然知っているべきであると強調している場合もある」ことにも繋がる。つまり、「のだから」の原因・理由文では前節が相手の知っている内容になっている場合が多いが、そうでない場合でも、前節の内容は相手を知っているべきであるという話し手による強調が見られる場合がある。上記の例文 13) では、「まだ子供」ということは聞き手も知っている情報であると解釈できる。しかし、例え聞き手が対象の人物が「まだ子供」であると思わない、ま

たは知らない場合であっても、この例文13)の話し手は対象の人物が「まだ子供」であることを聞き手に押し付けているという解釈もできる。つまり、「まだ子供だということは言うまでもなくても、貴方も分かるでしょう」という内容も含まれている。

例文14)と15)でも、前節の情報は相手も既知っているものである。さらに、この二つの例文の後節では、責任や後悔といったマイナスの感情も感じられる。14)の「のだから」は、前節という事実は聞き手も当然知っていることを表している上に、後節の内容も当然のことであるという話し手の強調も表していると考えられる。つまり、この場合「機構職員の個人アドレスにメールが届いている」という内容は、当然聞き手も知っているし、「最初の感染でメールのやり取りなどが流出したことを疑わなければならない」ということも当然であることを話し手は思っている。

一方、15)では「(これが)2回目の不審な通信である」という事実は相手も知っているはずと話し手は思っているし、「この時点で多数のパソコンがやられていることを想定し、機構全体のインターネット接続を遮断するべき」ということも当然なことであると思っていると考えられる。

「知っているであろう」と「当然である」という話し手の強調を表している「のだから」の特徴で、14)と15)のように若干聞き手を責めているニュアンスもある場合がある。

「のだから」という表現は、「から」と「ので」に置き換えることが可能である。原因・理由表現である「から」と「ので」は、事態系でもあり判断系でもあるため、その一部の機能で判断系である「のだから」に置き換える場合がある。しかし、「から」と「ので」にもそれぞれの特徴があり、自然に置き換えられない場合も当然ある。さらに言うと、「のだから」の原因・理由文における「から」と「ので」の交換性は両方とも同じではなく、片方が片方より自然に「のだから」と交換することができる場合もあると考えられる。特に、「ので」は「から」と比べて、判断系で使われにくいいため、「から」のほうは「のだから」と交換しやすい傾向がある²⁾。

また、「のだから」と交換することができるとはいえ、ニュアンスが全く変わらないともいえない。前田(2009)によれば、「から」を使用する場合、

前件が後件の理由であるというニュアンスが強くなる場合があると述べている。そのため、「のだから」と交換することができる場合も、「から」のほうが原因・理由を示すニュアンスが強いと考えられる。さらに、「から」も「ので」も、「のだから」に置き換えることが可能な場合でも、その「から」の場合と「ので」の場合のニュアンスは、必ず同じであるとは限らない。

16)a まだ子供だから、分からなくても仕方がないでしょう。

16)b まだ子供なので、分からなくても仕方がないでしょう。

例文 16a) と 16b) は 13) の「のだから」を「から」と「ので」で置き換えた例文である。この場合の「から」と「ので」は両方とも判断系で使用できるため、「のだから」と置き換えることができるが、それぞれのニュアンスは異なっている点がある。まず、話し手はどの部分にスコープしているかに関する相違点がある。「から」のほうは、前節が原因・理由であることを強く強調していると考えられ、前節の部分にスコープしていると考えられる。つまり、16a) の「まだ子供だ」の部分である。一方、「ので」のほうは、特にスコープしている部分はなく、話し手は全体的な内容を述べているだけである。次は、内容のスコープにも関係するが、主観的か客観的かに関する違いもある。これについては、永野 (1952) は、判断系の「から」は主観的で、「ので」は客観的で話し手が述べていると述べている。よって、16a) の場合では話し手の主観で因果関係を述べているが、16b) の場合では話し手は文全体の因果関係を一つの事態として客観的に述べているといえる。

「のだから」も、判断系の「から」の特徴である主観性も持っていると考えられる。典型的な判断系の原因・理由表現であるため、話し手の思考が関わっている場合が多い。その故、因果関係を主観的に述べている場合も多いと考えられる。

また、「のだから」は判断系の原因・理由でしか使われていないため、事態系にも使用できる「から」の原因・理由文で「から」と交換することができない場合がある。「のだから」を「から」で置き換えることが可能な場合があるとはいえ、「から」を「のだから」で置き換えることができない場合もあると考えられる。前田 (2009) は、「から」「ので」との違いに関して、「のだから」の用法を 3 点にまとめている³⁾。その中で、「原因を尋ねる疑問文

の答えとなる場合には用いられない」という「のだから」の用法の制限がある。それに対して、「から」は原因を尋ねる疑問文の答えとして使用されるため、その場合の「から」は「のだから」で置き換えることができない。

さらに、「から」「ので」の使い分けに関しては、使い分けを決め付けにくい点がある。前田(2009)によれば、必ず「から」または「ので」しか使われないと決め付けることは難しく、許容度には地域差と個人差も大きいと述べている。

3. 「のだから」に対応するタイ語の表現

日本語では事態系と判断系の原因・理由表現はあるが、タイ語ではそのような分類はない。さらにいうと、タイ語における原因・理由表現は、日本語でいう判断系のような用法があるかどうかに関してもまだ不明な点がある。よって、日本語の典型的な判断系の原因・理由表現である「のだから」を対象として、タイ語の代表的な原因・理由表現の用法と比較することを試みる。

タイ語における因果関係を表す表現は、「原因・理由を表す」と「結果を表す」の2種類に大きく分けられると考えるが、いずれも日本語における原因・理由表現に対応していると考えられる。「原因・理由を表す」の代表的な表現は *phrǎʔ* であり、「結果を表す」ほうは *cuŋ* である。

まず、この二つの表現の一般的な用例を挙げてみる。

17) *khǎw mây-pay phrǎʔ càʔ tɔŋ rɔɔ-ráp khèek* ^(R)

彼 行かない CON FUT must 迎える 客

お客を迎えないといけないから、彼は行かない。

18) *thǎʔnɔn bon khǎw sēn ní antàʔraay cuŋ hâam cháy*

道 上 山 道 この 危ない CON 禁ずる 使う

sàn-coon-pay-maa ^(P)

行き来する

この山道は危ないから、通行止めになっている。^(P)

上記の例文から *phrǎʔ* と *cuŋ* の違いを説明すると、*phrǎʔ* のほうは原因・理由を表すため、*phrǎʔ* の後は原因・理由が続いているのに対して、*cuŋ* の

ほうは結果を表すため、cuŋ の後は結果が続いている。要するに、17) のタイ語文は「結果 + phrɔʔ + 原因・理由」という構造になっているのに対して、18) のタイ語文は「原因・理由 + cuŋ + 結果」という構造になっている。ところが、両方とも日本語に訳す場合、「から」の原因・理由文に対応する。これは、phrɔʔ と cuŋ の間には文構造における相違点はあるが、実際では意味的な違いはさほどないからであるといえる。そのため、前節と後節を置き換えれば、phrɔʔ と cuŋ を交換することが可能な場合もある。実際、例文 17) と 18) もそうである。このように、phrɔʔ と cuŋ は一般的な原因・理由を表す「から」に対応していることが見られる。一方、判断系の内容を持つ原因・理由文でも、次の例文 19) のように、phrɔʔ が「から」に対応している場合がみられる。

- 19) khǎo khún ɲəən-duan phrɔʔ phǒm mây-phɔɔ kin khráp^(o)
 お願い 上げる 月給 CON 僕 足りない 食べる MPP
 食べるのに足りませんから月給を上げてください。^(o)

例文 19) のように、日本語文における後節では「～てください」という命令・依頼を表す表現があり、この例文の「から」は判断系である。この「～てください」は、19) のタイ語文の khǎo に当てはまる。タイ語における原因・理由文には、まだ事態系と判断系という概念はないが、19) の文の内容と原因・理由表現 phrɔʔ の意味・用法から見れば、この phrɔʔ は判断系の「から」と同じような働きをしているか、ということが言える。「khǎo khún ɲəən-duan」という前節は、話し手の希望であり、結果でもある。そして、その「phǒm mây-phɔɔ kin khráp」という後節は、話し手の判断の根拠であり、後節の原因である。

言語の特徴によって、タイ語文と日本語文の節の順番は異なっているが、意味の点から検討すれば、19) のようなタイ語の phrɔʔ 構文は、日本語における判断系の「から」の原因・理由文と変わらないといえる。因みに、phrɔʔ 構文は、前節と後節を置き換えることで、cuŋ 構文にすることができる。19) の場合でもそれは可能であるが、khǎo という依頼の表現を yàak-khǎo というさらに丁寧な表現にする必要がある⁴⁾。

20) phǒm mây-phəw kin khráp cuŋ yàak-khǒw khúin ɲəən-duan
 僕 足りない 食べる MPP CON お願い 上げる 月給
 食べるのに足りませんから月給を上げてください。

節の順は異なるが、19)と20)は、殆ど意味の違いはないと考えられる。とはいえ、ニュアンスに違いはないともいえない。これは phrɔ̄ʔ と cuŋ の特徴に関係している問題である⁵⁾。

このように、判断系の「から」は、タイ語の原因・理由に対応している点がある。次に、「のだから」の用例を挙げる。

21) お前はもともとこやつを刺そうとしたのではないのだから、これは事故だ。

naay mây dâw tân-cay càʔ theŋ khǎw yùu-léew daŋ-nán
 お前 NEG PAST つもりだ FUT 刺す 彼 もともと CON
 thùu-wâa pen uʔbàttiʔhèet
 ~と思う COPU 事故

例文21)の訳文であるタイ語文は、phrɔ̄ʔ と cuŋ ではなく、daŋ-nán という表現が使われている。この daŋ-nán という表現は cuŋ と同じく、結果を表す表現である。意味と用法は、両方ともほぼ同じであり、置き換えることが可能な場合が多くあり、またはともに使われている場合も多い。実際、例文21)も daŋ-nán の代わりに cuŋ を使用することが可能であり、daŋ-nán-cuŋ という複合語の形で使用することも可能である。その場合でも、文の内容に影響はない。ニュアンスは変わらないとはいき切れないが、daŋ-nán-cuŋ のほうが最も解説的なニュアンスになるといえる。とはいえ、因果関係を表す意味と用法に関しては、daŋ-nán でも cuŋ でも変わらない。

例文21)の「のだから」は、前節が話し手の後節という結論を出す理由であることを表している。意味を考えれば、この例文の daŋ-nán のほうも同じような働きをしている。ただし、タイ語文の後節には、話し手の結論であることを表す表現も出ている。thùu-wâa という表現は日本語で言うならば、意味は「という訳で」に近いと考えられる。この表現があるため、21)のタイ語文は日本語と同じく、判断系の原因・理由文であることが理解しやすい。また、次のような例文もある。

- 22) 私だってろくに部屋には帰ってこない生活をしているのだから、得体が知れない点ではお互い様かもしれない。⁽¹⁾

phǒm eɛŋ-kǎʔ chá-y-chiivít bɛɛp mây úa-hây-dây klàp hòŋ
私 だって 生活する ような NEG できるように 帰る 部屋
bòoy nak daŋ-nán kaan-thii phǒm míʔ-àakt chíi-chát khon
頻繁にちょっと CON こと 私 NEG 特定する 多分
pen khwaam-phít khòŋ tháy-sǎŋ-fáay kraʔmaŋ^(N)
COPU 悪い の お互い だろう

例文 22) も、タイ語文では daŋ-nán が使われている。例文 22) の日本語の後節では、「かもしれない」という話し手の判断を表す表現が使われている。一方、タイ語文のほうでは、khon と kraʔmaŋ という表現が使われている。この二つの表現は 22) のようにともに使うことができるが、別々に使用することもできる。いずれの場合も、khon と kraʔmaŋ は、日本語の「かもしれない」と類似している意味を持つ表現である。つまり、この二つの表現はタイ語における話し手の判断を表わす表現であり、22) のタイ語文も日本語でいう判断系の原因・理由文であることが分かる。このように、「のだから」はタイ語の daŋ-nán に対応する用例が見られるが、cuŋ に対応する用例もある。

- 23) 本名はその時聞いたはずだが、五年間男爵で通していたのだから、今さら覚えているはずもない。⁽¹⁾

chúuw-cij khǎŋ kee phǒm mân-cay-wâa dây rúu tâŋ-tèe
本名 の 彼 私 はず 得た 知る から
khráŋ-nán tèe phrǎʔ ríak-wâa thâan baa-ron maa-tàʔlǎot hâa
あの時 でも CON1 と呼ぶ 貴方 男爵 ずっと 5
pii tɔɔn-níi cuŋ míʔ-àat cam-dâay léɛw^(N)
年 今 CON2 はずがない 覚え RERF

例文 23) では、phrǎʔ と cuŋ が両方とも使われているが、原因・理由と結果を接続しているのは cuŋ のほうである⁶⁾。例文 23) では、「ríak-wâa thâan baa-ron maa-tàʔlǎot hâa pii」という前の文があり、この文は原因理由であることを表すために、この文の直前に phrǎʔ が置かれている。しかし、この phrǎʔ

は接続表現ではない。後の文は「mí^ʔàat cam-dâay léew」であり、この文が前の文の結果であること、そして二つの文は因果関係で結ばれていることを表すために、この二つの文の間に cuŋ が使用されている。

例文23)の cuŋ は、21)と22)の daŋ-nán と同様、日本語における「のだから」に対応している。ところが、23)の cuŋ を daŋ-nán で置き換えることができない。その理由は、cuŋ と daŋ-nán の間には、位置の違いがあるからである。cuŋ は文の間に位置する表現であり、主語または「今」や「現在」などの時制が文頭にある場合、cuŋ はそれらの単語の後に位置する。それに対して、daŋ-nán は必ず文の前に置く表現である。その文に主語などがある場合、それらも必ず daŋ-nán の後に位置する。23)のタイ語文では、tɔɔn-níi という時制があり、その後に cuŋ が使用されているため、その cuŋ をそのまま daŋ-nán で置き換えることができない。また、「時制 + cuŋ」もかなり典型的な cuŋ の形式の一つである。そのため、23)の cuŋ を取り除き、時制 tɔɔn-níi の直前に daŋ-nán を使用する場合、不自然な文構造になる。

例文21)と22)とは異なっているが、例文23)のタイ語における結果文の中にも話し手の判断を表わす表現がある。それは、mí^ʔと àat を併せて、mí^ʔ-àat という表現である。この mí^ʔ という表現は mây と同様、否定の表現である。一方、àat という表現は可能性を表す表現ある、しかし、可能性があるということだけを表す表現であり、話し手の確信は表さないため、日本語の「はず」より「かもしれない」のほうに近い。ところが、mí^ʔと併せて、複合語になった mí^ʔ-àat は、「その可能性はない」「ありえない」または「できない」という意味を表す表現になり、一部の用法では「はずがない」に近い表現になっている。よって、23)の場合にも、日本語文と同様、タイ語文にも判断系の表現がある。

- 24) せっかく三人揃ってゆっくり話のできる時間なのだから邪魔しない方がいい^(A)

phrɔ̌[?] nī pen oo-kàat dii sǎmràp thəə khun-phôo lé[?]
 CON1 これ COPU 機会 いい にとって 彼女 お父さん と
 khun-mêe thīi cà[?] day yùu phrɔ̌om-nâa-phrɔ̌om-taa-kan
 お母さん COMP FUT できる いる 全員揃って
 sǎam-khon phôo-mêe-lūuk dāy phūut-caa pràp-khwaam-khāw-cay-kan
 三人 親子 できる 喋る 分かり合う
daŋ-nán-cuŋ mây-sǎmkhuan cà[?] pay rópkuan^(Q)
CON2 するべきではない FUT 行く 邪魔をする

例文 24) のように、daŋ-nán と cuŋ を併せて、daŋ-nán-cuŋ が使用されていることもある。そして、この daŋ-nán-cuŋ も日本語の「のだから」に対応している。この例文の場合では、daŋ-nán-cuŋ の代わりに、daŋ-nán か cuŋ だけを使用することも可能である。例文 23) と違い、結果文の中に主語や時制などがいないため、そのまま daŋ-nán と cuŋ の交換も可能である。この例文では、文頭に phrɔ̌[?] という表現も使用されていて、その後の部分が原因・理由であることを表している。しかし、この phrɔ̌[?] は接続役ではないため、省略しても文全体に影響はない。

また、この例文のタイ語文における判断系の表現は、mây-sǎmkhuan であると考えられる。この表現は sǎmkhuan の否定形で、「相応しくない」という意味があるが、「～しないほうがいい」「～べきではない」という意味もある。よって、これはこの例文において話し手の判断を表わす表現である。そして、判断系の因果関係を表す「のだから」に対応して、daŋ-nán-cuŋ が使用されている。例文 21) から 24) までのように、「のだから」は daŋ-nán と cuŋ に対応している場合がよく見られるが、他の表現に訳された場合も見られる。例えば、次の例文 25) である。

- 25) いつも身が、ちゃんちゃんと決っているのだから、気持の上から楽なことだろうと思う。^(H)

yóthhãa-banda-a-sàk kô[?] nêenoon taam-lamdàp-khân phrô[?]-nán

階級 も ちゃんちゃん 順調に CON

khonj sã[?]baay náp-tân-tèe dâan aarom-khwaam-rûu-suèk loj-maa^(M)

だろう 楽 から 方面 気持 下まで

例文 25) のタイ語文では、因果関係を表す接続詞が phrô[?]-nán という表現が使われている。この表現は phrô[?] が含まれているが、意味と用法は dan-nán と cuuj と同様であり、結果を表す表現である。さらに、これと類似している表現が phrô[?]-chà[?]nan という表現があるが、phrô[?]-nán のほうは口語的な表現である。また、phrô[?]-chà[?]nan という表現は、phrô[?] と chà[?]nan で構成されている複合語の表現であり、chà[?]nan は結果を表す表現である。そのため、phrô[?] がなくても、chà[?]nan のみで phrô[?]-chà[?]nan と同じように使用できる。それに対して、phrô[?]-nán を nán のみにして結果を表す表現として使用することはできない。当然ながら、phrô[?] は原因・理由を表す表現であるため、25) のような場合では nán を省略して、phrô[?] のみを使用することもできない。

例文 25) では、phrô[?]-nán という表現を dan-nán で置き換えることも可能である。phrô[?]-nán は dan-nán と同様、「のだから」に対応している。また、例文 25) のタイ語文における結果文の中に話し手の判断を表わす表現もある。日本語文のほうでは「～だろう」と「～と思う」が使用されているのに対して、タイ語文では khonj という表現が使用されている。この表現は「多分」や「～だろう」などの意味を表し、話し手の推量または推測を表す表現である。よって、例文 25) のタイ語文も日本語と同様、話し手の判断の根拠を表す原因・理由構文となっている。

ところが、25) のタイ語文では phrô[?]-nán と dan-nán を互いに置き換えることが可能であるが、それらと比べて cuuj で置き換えることは難しい。phrô[?]-nán は dan-nán と同様、必ず結果文の文頭に位置する表現である。それと比べて、cuuj は結果文の文頭に位置することも可能な表現であるが、その文頭の単語または表現によって、cuuj を文頭に置くことができない場合がある。例えば主語または時制が文頭にある場合がこれに該当する。例文 25)

いが、phr⁵、daŋ-nán、cuŋ、phr⁵-ŋán、そしてphr⁵-chà³nanの中で、daŋ-nánが「のだから」構文の対訳で最もよく見られると考えられる。しかし、これらの表現の中で最も判断形の因果構文で使用しやすいのはどの表現かを明確にできたというわけではない。これらの表現のそれぞれの特徴を比較考察をし、さらに検討する必要がある。

【注】

- 1) 実は「から」は、事態系だけではなく、判断系の用法もある表現である。それに対して「のだから」判断系の用法でしか使用されていないと考えられる。
- 2) 前田（2009）によれば、「から」は後節に現れる文のタイプにあまり制限がなく、非常に多くの文のタイプが来るが、「ので」のほうは後節に現れる文のタイプに制限があり、事態系のほうはよく見られると述べている。
- 3) 前田（2009）ページ172参照。
- 4) khǒoという表現は、相手から何らかを求める意味を持ち、「～てください」に近い表現である。ところが、この表現のみでは丁寧さがないため、「～くれ」というニュアンスになる場合もある。または、図々しく相手から求めているというニュアンスになる場合もある。例え文末に丁寧語がある場合でも図々しく感じられることがあるため、他の表現と一緒に使用して、図々しさを和らげる場合がある。19)もkhǒoの代わりにyàak-khǒoのほうが丁寧である。
- 5) phr⁵とcuŋの違いに関しては、まだ明らかになっていない点があるが、文語的と口語的という違いがある。また、phr⁵は「から」と同様、結果の原因を示すという意味を強調しているという特徴があるといえる。それに対して、cuŋは原因から結果を述べる表現であり、因果関係の流れを客観的に述べている特徴があると考えられる。
- 6) phr⁵とcuŋは、同じ文に使われることがあるが、その場合のphr⁵は原因・理由である前節に使われ、cuŋはその前節と後節を接続するために使われる。要するに、その場合の接続詞はcuŋのほうであり、phr⁵よりcuŋのほうが重要な因果関係を表す役目を持っている。また、その場合のphr⁵は前節が原因・理由であることを強調するため使われていると考えられ、省略してもいい場合が多い。ところが、例文23)のような逆接と接続している因果構文の場合では、phr⁵もcuŋと一緒に使われる場合が多いと考えられる。この場合では、phr⁵がtèeという逆接の表現と一緒にあって、tèe-phr⁵という複合的な表現になっており、逆接での因果関係を表す表現になっていると考えられる。

【例文出典】

- (A) 阿川佐和子 (2012) 『ウメ子』、小学館文庫、小学館。
- (B) 赤川次郎 (2003) 『茜色』、光文社。
- (C) 岩井三四二 (2009) 『竹千代を盗め』、講談社。
- (D) グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』、くろしお出版。
- (E) 時雨沢恵一 (2000) 『キノの旅』、電撃文庫、KADOKAWA。
- (F) そえだ信 (2013) 『ねずみと巨獣』、デザインエッグ社。
- (G) 太宰治 (1988) 「風の便り」『太宰治全集 4』、ちくま文庫、筑摩書房。
- (H) 太宰治 (1954) 『女生徒』、角川文庫、角川書店。
- (I) 夏川草介 (2009) 『神様のカルテ』、小学館文庫、小学館。
- (J) 夏目漱石 (1988) 「行人」『夏目漱石全集 7』、ちくま文庫、筑摩書房。
- (K) 夏目漱石 (1991) 『こころ』、集英社文庫、集英社。
- (L) Chaninan Gittipatimarkun. 2008. *KINO NO TABI*. Bangkok : Bliss publishing Press.
- (M) Monthar Pimthong. 2009. *Ruang-san Yipun 5*. Bangkok : Chulalongkorn University Press.
- (N) Pornchai Wittayaleetpan. 2012. *Ichito khun-moo huajai theewadaa*. Bangkok : Amarin publishing Press.
- (O) Preeya Ingkaphirom. 2005. *Waiyakorn Phaasaa Yii-pun*. Bangkok : Dokya Group Publishing Press.
- (P) Somkiat Chawengkijwanich. 2010. *20 hua-khoo ded phichit Waiyakorn Phaasaa-Yipun Chan-Klaang*. Bangkok : TPA Press.
- (Q) Suwannaa Arai. 2010. *Dek-ying Umeko*. Bangkok : NANMEEBOOKS Press.
- (R) Tianchai Iamworamate. 2008. *Pojjanarnugrom Thai Chabap nakrian*. Bangkok : Ruamsan Press.
- (S) <<http://www.yomiuri.co.jp/>>2015/06/06 アクセス

【参考文献（日本語文献）】

- 澤西稔子 (2003) 「動詞・連用形の性質」『日本語・日本文化』、第 29 号、pp. 47-66、大阪大学日本語日本文化教育センター出版。
- 白川博之 (1995) 「理由を表わさない「カラ」」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』、くろしお出版。
- 高橋清子 (2011) 「タイ語の関係節構文」『70 年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』、pp.253-275、開拓社出版。
- (2013) 「タイ語の節連接標識」『神田外語大学紀要 第 25 号』、pp.157-178、神田外語大学出版。
- 田中寛 (2004a) 『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』、ひつじ書房出版。

- (2004b) 「接続詞のように使われるタイ語の *thambây* について—「使役」と因果関係—」『指向 第2号』、pp.77-92、大東文化大学大学院外国語学研究所日本語専攻出版。
- (2004c) 「「カラ」と「ノデ」をめぐる諸問題 —認知的把握にもとづく再考—」『日本語複文表現の研究 —接続と叙述の構造—』、白帝社出版。富田竹二郎(1957)『タイ語(日本語)基礎 アジア語学双書Ⅳ』、江南書院出版。
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6第11部 複文』、くろしお出版。
- ピヤトーン・ケウワッタナ(2014a)「接続表現をめぐる日タイ対照研究」『外国語学研究』、第15号、pp.201-208、大東文化大学大学院外国語学研究所出版。
- (2014b) 「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究」『日タイ言語文化研究』、第2号、pp.153-163、日タイ言語文化研究所出版。
- 前田直子(2009)『日本語の複文』、くろしお出版。
- 三浦佑子(2007)「複文における複合接続助詞の機能—「せいで」・「おかげで」について」『言語科学論集』、第11号、pp.35-46、東北大学大学院文学研究科言語科学専攻。
- 益岡隆志(1997)『新日本語文法選書2 複文』、くろしお出版。
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法・改訂版』、くろしお出版。

参考文献(タイ語文献)

- Kamchai Tongloo. 2009. *Lak Phaasaa-Thai*. Bangkok : Ruamsan Press.
- Methawee Yootthapongthada. 2001. *The Study of Relative Clause in Documents of the Rattanakosin Era*. Bangkok : Thammasat University Press.
- Nawawan Phanmetha. 2010. *Waiyakorn Phaasaa-Thai*. Bangkok : Chulalongkorn University Press.
- Phrayaa Upphakitsilpasan. 1937. *Lak Phaasaa-Thai*. Bangkok : TWP Press.